

## シク教の祈り(2)

前回は、主にヒンドゥー教とイスラーム教の神の形態を紹介いたしました。ヒンドゥー教における神の観念は、日本人一般が漠然と抱いている神の観念に近いものがありますので、比較的理解し易いでしよう。しかし、イスラーム教のそれは、余り日本人には馴染みがない為にちょっと理解がしづらいかもしれません。そこで、もうすこし説明をいたしましよう。

ヒンドゥー教の神概念は、日本人が神仏に抱く観念と似ています。それは「現世利益」を与



司 研究会員 坂俊研究室専任 東保

えてくれる存在として神を考えるということです。従つて、その祈りも人間の利害を中心になつてくるという特徴があります。勿論本当の信仰心から純粹な祈りを神や仏にささげる人も多いですし、またいつもは「現世利益」一辺倒でも、心から祈ることだってあります。もつとも両者は形の上では一緒なので煩わしいのです。しかし、神(仏)と人間との関わりを考えると、あるいは心のありかたを考えるとこの両者は大変大きく違うのです。つまり同じ祈りでも、か

たや神との契約あるいはその履行を神に願う行為であり、かたや神を恐れ、神の前に我を捨て去つて身を捧げる事になります。言葉でいえば前者が儀礼的祈りであり、後者は心からの祈りということになります。日本で一般的なのは前者の祈りです。つまり、この「現世利益」の為

の祈り、あるいは儀礼です。この種の祈りは何処にその根拠があるのでしようか。少し考えてみましょう。

「現世利益」とは、何か神にお願いして、神の力で其れを実現してもらおうということです。ということは、神は、人間の言うことを聞



いてくれる神でなければなりません。またそこに御財銭・供物あるいは犠牲が介在しますと神はそれらのもので、その判断を左右されるということになります。つまり、神と人間の関係は限りなく対等に近いということになります。更にいうと、この儀礼や供物等の介在物によって、神は人間とある種の契約を結んでいるともいえます。ですから人情として、高額の品物や込み入った儀礼やその他なんでも大げさなことが良いとされ、願いの大きさ、困難さに比例してそれらも大きくなるのです。というわけで、日本でも神様はいかにも大口の寄進者や供養者に余計に恩寵を施すようですが、これがインドの神々となりますとなおさらです。呪文（マントラ）やダラニなどによつて、まるで操り人形のようになるとまでいっている者さえあるほどです。つまり、人間に限りなく近い神々ということになります。

つまり、神は人間とほとんど違わないわけです。ということは、人間中心の世界観のなかに神がいるということになります。ここに、ヒンドゥー教や日本の神々のような多神教の神観念の基本的構造があります。

それに対して、イスラーム教つまり唯一の神は、決して人間の存在を特別視しません。その意味でいかなる儀礼も、供物等も必要としないのです。ですから、イスラーム教には原則として聖職者はいません。勿論信仰をまとめるための長はおりますが、それとても人間のなかの序列であつて、神から見たら区別なしです。ここが一神教の合理的なところです。

それに対し、多神教のヒンドゥー教や日本のそれはいかがでしようか。インドにはカースト制度があり、バラモンが世に君臨し、既に何回か紹介したような宗教的社会的差別があります。日本でも人間が神として崇められる（天神

さまとか、東郷神社とか）などということがあります。しかし、これはイスラーム教では思ひもよらないことなのです。

「神はその気になればあつという間にこの世など吹き飛ばしてしまうこともできるお方と、コーランに述べられているように、人間の思いも、願いも全く通じない、人間とは隔絶した存在なのです。ですから、儀礼的祈りによつて見返りをもとめようなどという人間側からの働きかけなど全く通じないのです。それは、操り人形が操り手を動かすことができないようなものです。その場合人間は、この絶対的な神とどう関わるかといいますと、ひたすら神の心に縋るしかないのであります。それとも神が決めるところなので、どんなに祈ろうが祈つたことで神の心を動かせるなんてことにはならない。

というわけで、ヒンドゥー教の神とイスラーム教の神は全くちがいますし、祈りの位置付け

自体もまったく違うということがおわかりいただけたと思います。

前回紹介した、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒との祈りの様子の違いは実にこんなところからきていたのです。

というわけで、これを結びつけることは至難のことということは、わかつていただることと思います。それをシク教はいかに実現したか、次回に検討しましょう。

